

剣・ひびく

篠原 讓

一

「よし、ここぞやるぞ」

そう言うと、上原遼太郎は立ち止まって足場を確かめた。

(えっ、ここぞ?)

岡田玲子は思わず周りを見回した。二人の立っている場所は、一応芝生の上とはいえ、すぐ脇は舗装した道になっていた。

今日は四月六日。平日だが春休み中とあって、ここ丸山公園内は散策する家族連れの姿が目立つ。時刻は夕方の四時頃であろうか、まだ陽は高い。

「でも、先輩、すぐそこに人がいます。それに向こうからは親子連れが……」

玲子は色白の頬を少しピンクに染め、長身の遼太郎の横顔を見上げて訴えた。

「分っている」

遼太郎は事も無げにそう言うと、涼しげな切れ長の目をやや丸くして、ゆっくりと顔を動した。いかにも回りの風情を察^さでている様子だ。

「満開の桜の木の下で剣を交える……。最高だと思わないか。それに、集中すれば他のことはいっさい目に入らないはずだ。違うか、岡田！」

「それはそうですね……」

玲子はまだ動揺していたが、すぐにこう思い直した。

(先輩がこの場所を選んだのは、何か訳があるに違いない。それに稽古をお願いしたのは私の方からだし……。これは、やるしかないわね)

二日前の四月四日、大学剣道部四年の岡田玲子は、同期の島崎陽子、堀川照美と共に、三期上の先輩、上原遼太郎が顧問をしている高校の門をくぐった。

大学の春休みを使つての『出稽古』である。

相手は高校生だが、決して油断はできない。剣道は一瞬の勝負である。年齢とは無関係

に勤がいい者は強い。特に、相手の手の内を知らない初手同士の対戦の場合は、勝負勘の善し悪しが、試合の勝敗を大きく左右する。

出稽古の時はいつも、相手の門をくぐってから出てくるまでは、緊張の連続である。しかし、全てをやり終えた時に、その緊張感が何とも言えない心地好い満足感に変わっていく。玲子はそういう心の変化が好きであった。

高校の武道場は二階建てで、一階が柔道場、二階が剣道場になっている。剣道場の広さは、十メートル四方の試合コートが二面とれているところを見ると、ざっと十五メートル×三十メートルぐらいなものだろうか。

正面の壁の上方に、毛筆で『切磋琢磨』と書かれた額が掲げてある。そして、その下には、校名の入った濃紺の大きな『部旗』が広げて下げてあった。

三人は、道場の入口で、正面に向かって一礼すると、床の上を滑るようなすり足で、奥へと進んだ。白胴着に白袴、そして、防具をきりりと着けた三人がそろって道場に入ってしまった時、すでに横一列に整列し、正座して待っていた高校生の間から、感嘆の静かなどよめきが、さざ波のように起こった。

(よし、優位に立った)
と三人は思った。

剣道は、精神的な要素がその勝敗に大きく影響を与える。相手よりも自分の方が上だと思った時は、のびのびと技を出すことが出来るが、その逆だと、手が縮こまり、得意技もなかなか発揮できない。しかも、一瞬の勝負であるから、相手よりも、早く自分を優位に立たせた方が断然有利なのである。一度立たされた不利な状態を挽回するのは並大抵のことではない。まだ、面を着けて試合が始まったわけではないが、この気持ちのまま試合に臨むことが必要なことを、経験上三人は知っていた。

上原先輩の、多少誇張のある「強い大学生を迎えて……」という紹介が済んだ後、早速、三人制の試合を二回行うことになった。

いつも通り、『先鋒』・照美、『中堅』・玲子、『大将』・陽子の順でオーダーを組んだ。

試合の形式は、四分間・三本勝負で行われた。時間内に先に二本取った方が勝ちである。

一試合目。照美は一对一の引き分け。玲子と陽子は二本を連取して勝った。

玲子の調子はベストに近く、体がよく動いた。開始早々、思い切った『飛び込み面』が鮮やかに決まり一本を取った。二本目は、相手が挽回しようとして、あせって打ってくるところの小手を押さえた。『出小手』である。二本合わせて三十秒足らずで相手を退けた。

印象的には、とても強く映ったに違いない。

「試合目の相手は、一試合目で照美と引き分けた、女子部長の高柳幸子である。幸子は小柄で動きの良い選手だった。」

（油断大敵。さっきの試合では、照美から一本『小手』を取っている。小手には気をつけないと……）

鋭い気合とともに鮮やかに照美の小手を打った、先程の幸子の試合振りを、玲子は頭に浮かべた。先鋒の照美の試合は始まっていたが、意識は幸子との対戦に集中していた。すると、遠くで遼太郎の声がかすかに聞こえた。

「サチ、ちよつと来なさい」

と言ったようだった。

玲子がそちらの方を見ると、遼太郎が玲子の方を見ながら、幸子に何やら話している。

（きつと私に対する策を授けているんだ……。あの子が頷いている。何を言っているのかしら……。いけない、このままじゃ。敵の策にはまってしまつ）

そうしているうちに、先鋒の照美は二本勝ちして、面の中でニコツと笑いながら戻って来た。次は、玲子と幸子の対戦である。

道場内は、水を打ったようにシーンとしている。

二人は、立礼し、そんきょ蹲踞しつつ竹刀を抜き合わせた。

「始めー」

主審の宣告を聞かや否や

「キエーイー」

幸子の甲高い、まるで頭の天辺から絞り出すような気合が、静まり返った道場いっぱい響いた。気の充実した掛け声である。

玲子は、すぐに「ヤー」と応じたが、相中段に構えたお互いの間合いを、気合と同時に攻めてくる幸子の気迫に圧倒された。

幸子は、さらに、前に出ている右足の親指から、シリッ、シリッと詰めてくる。

次の瞬間、幸子は跳んだ。

「リテーー」

一試合目に、照美が一本取られた小手打ちである。玲子は咄嗟とつぱに出た。

三人の審判のうち、副審の一人が、幸子側の紅旗を上げた。

（他は？）

玲子は、横目で素早く他の二人の審判を見た。主審ともう一人の副審は、両手に下げた紅白の旗を、体の前で交差させながら左右に振っている。一本ではないという合図である。「オシイー」

高校側から、ため息交じりの声が漏れた。

玲子はホツとした。一本になっても仕方がないほど、いいタイミングで打たれた。ほんの少し、小手の有効部位を外れただけである。幸子の小手打ちと同時に、反射的に前に出ていなければ、完全な一本になっていたところだった。

——二人の間合は、お互いの体がぶつかるほど接近した。

向い合った二人は、お互いの胸の前で自分の竹刀を立て、鏢元つばもとを合わせて競り合った。

『鏢せり合い』である。お互いに、竹刀の切っ先はやや右斜めに開き、柄頭つかがしらを持つ左拳こぶしは、臍へその前でしっかりと握られている。

交差した竹刀と竹刀の間から、二人の眼と眼が合った。玲子は意外に思った。鏢せり合いの時は、ほとんどの者が鬪刺むさき出しの露骨な目をする。玲子はどんな時でもそういう目で見られることを好まなかった。……過去の嫌なことを連想させる目。欲情そのままの目……。しかし、幸子の眼は鋭くはあったが、涼やかなのである。力んでもいない、臆してもいない、自然のままの透き通った瞳とまだ。

幸子は絶えず動いている。小刻みに左右に体をさばきながら、右からも左からも「打つぞ」と攻めの気迫を示す。

玲子は、その攻めに対し「下がって打つたら、追って打つぞ」という気で応じた。そして、改めて背筋を伸ばし、小柄な幸子を見下ろすように姿勢を整えた。

その瞬間、幸子の姿が玲子の目の前から消えた。

防具の『面』は、それを着けると構造上眼前しか見えない。馬車馬の目隠しと同じで、横に対する見え方の角度は非常に狭い。その狭い視野から幸子が見えなくなったのである。

玲子は「はっ」とした。その瞬間、立っていた竹刀の手元が、ほんの少し上がった。

「ドオー！」

静けさを裂く気合とともに、玲子は、その僅かな胴の隙をしたたかに打たれた。

幸子は、一気に四、五メートルは下がった。そして、手応えのあった竹刀を、胴を打った姿勢の延長から、中断の構えに戻して『残心ざんしん』を取った。

紅旗が、一斉に三本上がった。幸子が『引き胴』で一本先取したのである。

（やられた。四、五回小さく動いたのはフェイントだったのね。最後は、大きく左へ動い

たので、急に見えなくなったんだわ。すばしっこい子ね。——よし、一本取り返さなきゃ

玲子は、打たれた原因をそう分析すると、気を新たに入れ直し、中央の開始線に戻った。

「一本目！」

主審は、上げていた紅旗を下ろしながら、開始を宣告した。

玲子は、積極的に攻めにまわった。『遠間』から『小手 面・二段打ち』や、思い切った『飛び込み胴』などを試みたが、いずれも不十分だった。

三分が経過した。残り時間はあと一分である。玲子は多少焦りを感じてきた。このままだと一本負けになってしまう。

(よし、身長差を生かして、思い切って面に跳ぼう)

そう思った玲子は、ツツツと間合いを詰めると「メーン！」と気合もろとも打ち込んだ。すると、同時に幸子も面を打ってきた。お互いの竹刀は、お互いの面を僅かにかすっただけであった。

審判の手は、三人とも上がらなかった。相打ち、または不十分と判断したようだ。どちらにしても、玲子の捨て身の面打ちも有効打突にはならなかった。

相面打ちで接近した二人は、また、鏝ぜり合いの体勢になりそうだった。

(一本目の時のように、フェイントの動きに惑わされないようにしなくては。それに、先輩から何か策を授かっているようだし……)

と玲子は、すぐに警戒し、気を引き締めた。

今度は早かった。鏝ぜり合いになった瞬間、幸子は間髪を入れずに技をかけた。そこには何のためらいもなかった。

「ドオー！」

気合とともに、四つ割の竹で組み合わされている竹刀が、グラスファイバーの胴を打った。「パチーン！」という鋭い音が、道場にいた全員に達した。

後は、一本目と全く同じ光景である。玲子から四、五メートル離れたところに幸子が残心を取って立ち、三人の審判がそろって紅旗を上げていた。

(負けた……)

玲子は潔くそう思うと、淡々とした動作で開始線へ戻った。

「勝負あり！」

審判の宣告を受けると、二人は静かに蹲踞し、竹刀を腰に納め、立ち上がった。

その時、約三メートルの距離で二人の眼と眼があった。

(いい腫をつつこる)

玲子は素直にそう思った。

(あの腫の相手に負けたのなら仕方がない。闘い終ったばかりなのに、なぜ、あんなに穏やかでいられるのだろう……)

力を出し切った爽やかさと同時に、なぜか幸子の腫に惹かれるものを感じつつ、玲子は試合場を背にした。

その後、大将の陽子は危なげなく二本勝ちした。

試合の勝敗は、大学側の四勝一敗一引き分けである。出稽古の初陣としては、勝率も内容もまあまあであった。

全体の一斉稽古が終わり、遼太郎の講評の後、玲子のところへ女子部長の幸子が挨拶に来た。

「お手合わせ、ありがとうございました」

幸子はそう言うと、屈託のない笑みを目元にたたえて一礼した。

「いえ、こちらこそ、いい勉強になりました」

玲子もわだかまりのない笑顔で返礼した。

(同じ『引き胴』で二本取られるなんて……完敗だわ)

そう思った玲子は、多少戸惑いながらも思い切って聞いてみた。

「私って罎ぜり合いの時、胴に隙があるのかしら」

「よくわかりません。私は試合になると無我夢中なので、あまり考えません。二本とも上

原先生に言われた通り、勘で打っただけです」

「言われた通りって……、先輩は、イイエ先生は、何ておっしゃったの」

幸子は少し間をおいた。そして、思い出すためか、わずかに横を向き、上方の遠くを見つめる目付きをした。

(やはり、いい腫だわ。この人と試合ができてよかった。この腫の人とならわかり合えそう……)

幸子はゆっくりと顔を戻すと応えた。

「確か、こう言ったと思います。『罎ぜり合いになったら、思い切って引き胴を打ってみる』と。そして、私が『いつ打てばいいですか』と聞いたら、『サチの勘で、いまだ！』と思った時だ』って言っていました。私は先生の観察眼を信じていますので、その通りにし

ました」

幸子が一礼して去った後、玲子は内心おだやかではなかった。

(先輩はなぜ『引き胴を打て』と言ったのだろ。私には隙があるのかしら。同じ技で二本も取られたのだから、何か問題があるのかも知れない。しかし、それは一体何なのだろう?)

その夜、意を決して、玲子は遼太郎へ電話を入れた。

その結果、明後日・六日に特訓を受けることになったが、玲子にはどんな稽古をするのか全く想像がつかなかった。

(「竹刀と木刀だけ持ってくればいい」と先輩は言っていたけど素面・素甲手で打ち合うのかしら……。それに場所はどこだろ?)

いろいろなことが脳裏をよぎり、玲子はあまり眠れなかった。

二

「岡田、どうした? ここじゃイヤか?」

遼太郎は、のぞき込むようにして玲子の決意を再度確かめた。

玲子は、その遼太郎の眼を見た時、ふと、幸子ゆづりと、先生の観察眼を信じています」という言葉を思い出した。

(私も信じるわ)

「いいえ、上原先輩。よろしくお願いします!」

いざとなると思い切りのいい玲子は、真摯な気持ちで頭を下げた。

二人の稽古場になろうとしている場所は、三十平方メートルぐらいの楕円形の芝生の上である。その中に、見事な桜の木が、二本離れて植わっている。二人は今、その桜と桜の間に入った。桜は満開であった。

上尾市の丸山公園は、地元では有名な桜の名所である。

沼の周囲には、特に多くの桜が植えられており、今、それが最盛を迎えていた。水面に優雅な姿を映している様はとても気品があり、まさに王者の風格を漂わせている。

二人は沼の脇を通り、その芝生に至る道を歩いてきた。道の両側に並ぶ桜を愛でながら、肩を並べて歩く二人を見た人は、若い恋人同士のように見えたに違いない。しかし今、二

人は周りの、のどかなムードとはかけ離れた世界に入ろうとしている。

「では、先ず、木刀を使って攻め合いの練習をしよう。大事なことは、剣先を相手の『正中線』から外さないこと。それに、自分の間合いを常に確保すること。この二点に留意して、お互いに攻め合うことにする。分かったね」

「はい！」

二人は一礼すると、躊躇し、木刀を中段に構えて立った。

玲子の木刀の切っ先は、ピタリと遼太郎の喉元に付けられた。一分の隙もない中段の構えである。もう、迷いは全くない。

遼太郎は自分の木刀を、玲子よりやや高めの中段に構えた。切っ先は、玲子の左眼に吸い込まれるように、これもピタリと向けられている。もう、先輩と後輩ではなかった。二人の剣士による気力の攻め合いが、二本の中段に構えられた木刀を通じて、絶え間なく続いていた。

(恐くない)

玲子はそう思った。今まで、大学で遼太郎と稽古をする時は、どうしても先輩の胸を借りているという意識があった。しかし今、面金の奥に見える遼太郎の瞳は、涼やかで透き通っていた。

(恐くない)

再度、玲子はそう思うと、滑るようにツツツと一歩足を前へ進めた。

遼太郎は、玲子が鋭く詰めてきた分だけ素早く下がった。

玲子には、遼太郎が、ややのけ反りながら退いたように見えた。きっと、自分の木刀の切っ先が、迫ってくるように見えたに違いない。

(これは、やれる)

そう思った玲子は、さらに、気を集中させて鋭く攻めた。

遼太郎は、以前とは別人のような玲子の攻めに対して、改めて構えの中心となる左手の小指に力を入れると、背筋を伸ばし、大きく構え直した。

ツツツ、ツツツと、芝生の上をすり足で二人は動く。中段に構えたお互いの木刀の切っ先が、三寸(約十センチ)ほど交わった『一足一刀の間合い』を保ったまま、二人の様子は全く変わらない。同じ姿勢、同じ間合いで前後左右に動く様子は、まるで機械仕掛けの二人の人形のようなのだ。

数分、攻め合いが続いた。

玲子が最後の攻めをしたところで、遼太郎は剣先を外し、構えを解いて言った。

「今日の岡田は別人のようだ。何か心境の変化でもあったのか」

（先輩を信じているからですよ）

とは、さすがに言えなかった。

「よくわからないのですが、自分でもすごく気が入っているなと思います」

遼太郎は、玲子の気が充実している様子を見て、今なら、あの事を理解させられるかも知れないと思った。

「よし、今の気力を持続したまま、鏝ぜり合いからの引き技の練習をしよう」

「はい！」

玲子は、躊躇なく返事をした。すると、心地好い緊張感が体全体に漲るのを感じた。

二人は『近間』で中段に構え合った。そして、お互いに大きく一歩前へ出て、鏝ぜり合いの体勢を取った。遼太郎の顔や胸が一気に玲子の眼前に迫ってきた。

（ワア、近い！ 鏝ぜり合いって、こんなに近づいてしまっんだ。普段の稽古の時は面を着けているから、お互いの面金で、少しは遠く感じるけど、本当はすごく近いんだわ。どうしよう……）

玲子の心臓の鼓動が、だんだん大きくなってきた。

「いいかい。この時には、左手の位置をこつして……」

遼太郎は、何のこだわりもなく、その体勢のまま説明を続けている。

玲子は「はい。あつ、はい」と答えながらも、つい、気持ちが悪く落ち着かず、上の空になっている自分をもどかしく感じた。

「……だから、こつ自分の体をさばいて、そして腰のひねりを使って、隙のできた右胸を打てばいいんだ。分かったかい？」

「あつ、はい」

「じゃあ、やってこらん」

玲子は、一応言われた通りに試みるのだが、全部は頭に入っていないので「えーと、こつ押して、そして……？」と途中で止まってしまっ。

「おいおい、どうしたんだ？ この間の試合で、なぜ二本も引き胴を取られたのか、それを理解するために、いまこつとして特訓しているんだらう？ 大丈夫か、そんなやり方で。」

自分が打たれたものと同じ技を習得することによって、その一瞬の相手の動きが読めるというものだ。技の難易度としては、三段の岡田にとっては、決して難しいものではないぞ」

遼太郎は、半ば呆れるように、そして、半ば劣るような口調で優しく言った。さらに、返事のできない玲子の様子を見て、決心したようにこう続けた。

「やはり、これは言っておいた方がいいだろうなあ。いいか岡田、よく聞くんぞぞ」

「は、はい」

玲子は、何を言われるかは全く見当がつかなかった。呆然とした顔と緊張した体で直立した。その姿を見て、遼太郎は、

「まあ、そんなに固くなるな。よし、その木の下で話そう」

と言うと、桜の木の方へ歩き出した。そして、

「この辺に座ろうか」

と言いつつ、先に腰を下ろした。玲子は珍しく、ためらわずに横に座った。そして、何を言われるかは分からないが、特に不安は感じなかった。

(こうして先輩の横に並んで座るのも悪くないわ。なぜか落ち着く。前にもこんな場面があったような気がするけど……。ウーン、あるわけないか)

自然にこんなことが頭に浮かんできている。さっきまでの緊張感が嘘のようであった。

夕風が頬に涼しく当たる。とても心地好い。

その風が、桜の花びらをひとひら舞わせた。一呼吸おいて、またひとひら。玲子は、ゆっくりと舞っている花びらを目で追った。

花びらは、クルツ、クルツ、クルツ、クルツと数回転して地面に落ちた。その時、遼太郎は口を開いた。

「実はね。僕は以前から気付いていたんだ。そのことは、恐らく岡田自身は気付いていないかも知れない……」

「何でしょうか」

「岡田は、他人が、特に男性が、ある一定距離まで接近してくると、そこで全面的に壁を作ると言うか、バリヤーを張ると言うか、心も体も固くしてしまうところがある。人は誰でも多かれ少なかれ、そういう面を持っていると思う。しかし、岡田の場合は、それが極端なんだな。勝手な推測をすると、幼児期から思春期ぐらいまでの間に、親兄弟を含めた男性とリラックスして話をしたり、いっしょに行動したりする経験が少なかったのではないかな。あるいは、同じ時期に嫌な体験をしたとかいうことかも知れないが……。剣道を始めたのは高校からだったよね。何かそういうことを克服するために選択したのかなと思っていたのだけれど……。どうだろう」

玲子は黙って聞いていた。思い当たる節はあった。

(上原先輩って怖い人だな。だけど、どうしてわかるんだろう……)

「確かに、そういう面はあると思います。しかし、先輩は、どんな時にそう感じたのですか」

遼太郎はニコツと笑うと、何か懐かしいことを思い出すような顔付きで話し始めた。

「岡田が、ポニーテールにした髪をゴムが何かでキリッと締めて、緊張した顔で入部の挨拶をしたのが三年前だった。その時から折に触れて、岡田のことを観てきたが、いろいろな場面でそういうことを感じたのさ。例えば、飲み会の時。剣道部だからよくあるよね。そういう時って、必ずといっていいほど、岡田は一番端の席にいる。しかも女子の隣に。そして、男子の先輩から「おい、岡田！ もっと飲めよ」なんて言われて、酌してもらった場面では、顔はニコツと笑っているが、眼が緊張している。それは自分でも判っているんじゃないかな。」

—— そうそう、飲み会と云えば、一度だけこんなことがあった。確か、去年の忘年会の時だったと思う。珍しく岡田が酔った風で「上原センパイ、隣に座ってもいいですかあ」と言うなり、僕の隣にペタンと座って、今日の料理は何と何がおいしいから食べた方がいいですよ、などと、ほんの短い時間だったけど、話していったことがあった。その時（ホー、珍しいこともあるもんだ。明日、雪でも降らなきゃいいが）って思ったぐらいだ。—— その時のこと、覚えているかい？」

玲子は「はっ」と思った。さっき、この桜の木の下に座った時、前にも先輩の隣に座ったことがあったような気がする、と思ったのは気のせいではなく、その時のことなのだ。玲子はその時のことを思い出しながら、改めてこつ思った。

(今、なぜ、こうしていられるんだろう。男性の隣に座って「悪くないなあ」って感じている自分は、一体どうしたんだろう。今までと何かが違う)

「どう？ 覚えている？」

遼太郎の再度の問いに、

「エッ？ ええ、覚えています。うっすらと、ですけど……」

玲子はかろつじて応えた。そして、自分の姿勢を遼太郎の方へ向けると、不安そうに聞いた。

「あのオ、そういう面って、剣道の時にも出ているんですか」

「そうそう、それが今回の特訓の本題だったね。では、その話をすることにしよう」

そう言うつと遼太郎は、体全体を玲子の方へ向けた。その時、二人の内側の膝が軽く触れた。玲子は、いつもなら反射的に引つ込めてしまうのだが、何故かそうしなかった。

「岡田は、本当に剣道が強くなった。先程の木刀での攻め合いの時も、鏝ぜり合いの体勢になった時は、こちらが苦しくなるぐらい攻めが効いている。しかし、鏝ぜり合いの体勢になつたら、どうだったかな……。自分でも分かっているだろうが、もう全く気持ちが動揺している。さつきは防具なしでやったのだから、ある程度は仕方がないでしょう。しかし、防具を着けた時はどうか、自分で分かるかい」

「いいえ、自分としては普通にやっていると思いますが……。よくわかりません」
「一見は、基本に則つて、しっかり構えていると思う。しかし、心の中では（相手を離そう、もっと離そう）と思っている。だから、ちよつとして動きの中で、自然と両手に力が入り、特に、上にある利き腕の右手には、より力が入るので、その分だけ右胸が空き、隙ができる。空くといつても、ほんのわずかのことだけだね」

と言つて遼太郎は、座つたままその動作をして見せた。そして、さらに、話を続けた。
「岡田は、男女を問わず、鏝ぜり合いになると、自分では気付かずにそうしているんだと思う。女子部長の高柳に、引き胸を打たれたのも、そこ衝かれたからなんだよ。ただ、隙といつても、一見では分からないぐらいだから、誰にでも打てるという訳ではない。高柳は動がいい上に、思い切りがいい。だから、二度も打たたのであつて、並みの者だつたら、逆に、岡田に『追い面』を浴びていたはずだ。——どうかな、自分の知られざる弱点が分かつたかな……」

遼太郎の説明を、玲子は、途中からずっと、感謝の気持ちを抱きながら聞いていた。

（先輩は、こんなにも私のことをよく観ていてくれたのだ。しかも、このように特訓まで組んでくれて……）

「はい！ よくわかりました。確かに、鏝ぜり合いの時は自分でも、一瞬体が固くなると感じていました。そういう訳だったんですね。どうも、ありがとうございました」

「ホォー、また随分と理解できたようだけど、それを治すのは、並大抵のことではないぞ。長年、体で覚えてきたものは、一朝一夕では治らない。ただ、岡田のは、変な癖をつけたのと違って、精神的なものだから、そこを克服すれば、短期間で変えることができると思う。——そこで、素面・素甲手で、しかも、公衆の中で行うという方法を考えてみた」

（なるほどー！）

「たぶん三日ぐらい続ければ、一応の結果は出ると思う。——理解したかい？」

「はい、わかりました」

「では、どうする？ 続けるか」

「はい、お願いします！」

玲子は即答した。やり遂げる自信はあった。遼太郎の説明を、感謝しつつ聞いていた時から気持ちは決まっていた。

（上原先輩に付いて行こう！）と。

「よし、では、さっきやった動作のくり返しを何回かやって、今日は上がるう」

二人は桜の木の下から立ち上がると、先ほどの稽古場に戻った。

いつの間にか、太陽は西の空の彼方にほとんど沈みかけている。

公園内は夜桜を見ようとするとする人たちが三々五々散策している。宴は禁止されているのだらう、桜の木の下に座り込んでいる光景は何処にも見あたらない。

夜間照明のライトの中で、「ムッー」「ドオーー！」などという、声を抑えた二人の気合が、暫し続いた。

三

その夜、玲子は夢を見た。

以前、よく見た嫌な夢だ。いつもなら、寝汗をびっしょりかいて飛び起きるのだが、その夜は違っていた。それは、その場面に登場している当時の自分以外に、空中と思われる場所から、その様子を冷静に見ている現在の自分が、同時に存在していることだった。

—— 中一の夏。部活動で遅くなり急いで帰ろうとした時、通学用の自転車のブレーキが効かなくなったことがあった。仕方なく押していった。すると、途中の人通りの少ないところで男が突然現れた。そして、ハンドルを持つ玲子の手を握るように両手で押さえた。二十歳前後の若い男だった。目と目が合った。あの時の叔父と同じ目だった。まわりつくようなイヤらしい目……。とつさに男に向かって自転車を押し倒すと、カバンを引つくるように持って、後を見ずに走って帰った。家の人には何も言えなかった。手には、男の汗ばんで又タツとした感触が残っていた。何度も手を洗った。そして、頭を小刻みに振ってイヤらしい目を振り払った——。

久し振りにこの夢を見た。しかし、以前のように嫌悪感に襲われることはなかった。寝汗もかかなかった。

玲子はベッドの上でゆっくりと上体を起こし、壁に寄りかかった。そして、この夢を見た時には、必ず合わせて思い出してしまう幼い時の、あの衝撃的な体験を自分から思い描いた。

——七歳の桃の節句の時である。玲子は母と一緒に、母の妹である叔母の家へ遊びに行った。一人で雛壇を見ていると、そっと入ってきた叔父に自室へ誘われた。そこには、叔父の趣味である女性の人形が百体以上も置いてあった。玲子が座って人形と遊んでいると、にじり寄ってきた叔父は、両手で玲子の手を握り、ネットリした仕草で玲子の手の手を何回も撫でた。叔父の手は、さらに玲子のスカートの中へと伸びてきた。玲子は身を堅くさせ叔父を見た。そこには、鼻腔を広げ、薄口をあけた、だらしない男の顔があった。叔父は玲子と目が合つとニタツと笑った。舐めるようなイヤらしい目……。

母親の呼ぶ声で、反射的に立ち上がり逃げ戻ったが、舐めるようなあの目と、ネットリした手の感触は、玲子の頭からこびりついて離れなかった——。

ベッドの壁に寄りかかって、この事を思い出していた玲子は、先程の夢と同様、冷静な自分を感じていた。いつもなら、この事が脳裏に浮かんだ瞬間にイヤイヤと小刻みに頭を振って急いで振り払おうとし、そして、嫌悪感でしばらくは身動きできない状態になった。しかし、今日は違う。

(なぜかしら……。上原先輩と桜の木の下で稽古したことが、何かを変えたのだろうか) 過去の事を克服しようとして、大学で心理学を専攻し、ある程度の理論は理解できたものの、自分のトラウマを除去するまでには至っていなかった。それが、今は不思議なくらい、冷静に自分を見つめることができる。これはやはり、上原先輩に、今日特訓してもらった成果だと思う。

(克服できるといいな……。先輩、よろしく願います)

(——四月七日、二日目が終わった。

昨日の夢の話は先輩にはしなかった。絶対には言えないが、あの事は多分もう大丈夫だと思う。

さて、今日のことを振り返ってみると……。昨日と違って、理論よりも実践っていう感じだった。今日一日で、確実に普段の三日分の稽古をしたわね。やりがいがあった。ただ、昨日は木刀だけを使い、形を取る、寸止めで打つ、などの稽古だったけれど、今日は、お互いに竹刀を使って、打つ部位に構えた防具代わりの相手の竹刀を、実際に打ったので、

より確実なものになった。形から動きへ、スムーズに移行できる稽古の方法だったのでとてもよくわかった。先輩も

「大したもんだぞ、岡田。まるで、綿に水が吸い込まれるように、吸収してるな。教え甲斐があるぞ」

って言うてくれた。うれしかった……。

そうそう、今日の稽古の中で、とても良くわかったことがあった。『丹田』に気を置くということ。確か、先輩はこう説明してくれた。

「……昔から、『臍下丹田』という言葉がある。場所は、臍の下三寸（約十センチ）のところで、元気の集まるところと云われている。スポーツをやっている人には、分かりやすいと思うのだが……。例えば、野球、テニス、ゴルフなどで、ボールを打つ時に、丹田を中心に、腰を回転させて打った場合は、一番スムーズに、ボールを遠くへ飛ばすこともできるし、またコントロールすることもできる。要するに、体の中心になる場所で、『気溜め、気を出す』ところなんだ。

では、剣道で説明すると……と言いかけて、いや、その前に、岡田は打つ瞬間にどこに力が入る？」

って、私に聞いてきたんだっただわ。それで、

「左手の小指と下腹の腹筋だと思います」

って答えたら、ニコツと笑って、ほめてくれた。

「そう、その通りなんだよ。初心者ほど、手に、特に利き腕の右手に力が入ってしまうのだ。さすが、三段を取っただけのことはあるな」

うれしかったな、この時は。しかし、そのすぐ後に、谷底へ落とされるような思いを味わわれたのだった。

「では、鏝せり合いの時は、どこに力が入ってる？」

聞かれた瞬間に、「ガン」と竹刀で頭をぶたれたような気がした。そうだ、独りで形を取った時は、割合、丹田に力が入っていたが、先輩と組んだ時には、「はっ」と思った瞬間、手に、右手に力が入っていた。その時、先輩が、あのわかりやすい言葉で説明してくれたんだった。

「丹田の場所を頭で考える！ 考えるだけでいい。そうすが、自然と腕の力は抜けるはずだ」

言われるとおりに考えたら、本当に腕の力が抜け、状態がリラックスできた。

“考えるだけでいい”

あの言葉は、とてもわかりやすかった。

今日は、その後の稽古で、鐔ぜり合いからの『引き面・引き胴・引き小手』の技を、木刀と竹刀で、くり返し練習したけど、丹田に「気を置け」たのは、半分くらいだったような気がする。

明日はさらに上手に打てるように頑張らなくちゃ！

玲子は、たった二日間だが、遼太郎と一緒にいると、ゆったりとした気持ちになれることが、不思議でしよがなかった。そして、自分の気持ちのごく自然に遼太郎に流れていくことが、とてもうれしかった。

四

今日で連続三日である。

玲子は一度決心すると、周りの人がびつくりするぐらい、思い切った行動を取るところがある。

昨日の前半ぐらいまでは抑えぎみだった玲子の気合が、今日は遼太郎を圧倒するほど、鋭く、はっきりと聞こえる。そして、動きもそれにもなつて、スムーズな自然の流れになった。

「——さて、教えることは、ほぼ終わった気がするが、岡田自身はどうなのかな。もう少し続けたいか、それとも終わりにするか……」

遼太郎は玲子に終了の下駄を預けた。

稽古を始めてから、ゆうに三時間は経っている。始めたときは比較的暖かな日和の夕方であったが、もう八時近いせい風が冷たくなってきた。しかし、玲子のうっすらと汗ばんだ肌には、心地好いそよ風のように感じられた。

玲子は満足していた。確かにうまくいった。精神的なことも、ほぼ、克服できたように感じた。三日間しっかり集中できた。終わりにしてもいいのかなと半ば思いながら、ふと、桜を見た。

夜間照明にライトアップされて、満開の桜の花が白く、とても白く浮かび上がっている。そして、やや強くなってきた風に、ひとひら、またひとひら、次々と散り始めている。

(……きれい……)

玲子には、散り際が潔しとして、桜が武士に愛された所以が、とても良く分かる気がした。

その時突然、玲子はひらめきを感じた。

(そう、次から次へと散る、あの花びらのように、技の動作を行えばいいんだわ。

鏝ぜり合いで引き胴を打つ時は……」相手を押す・花びらの一枚目」「相手の手元を押し上げる・二枚目」「竹刀を振り上げる・三枚目」「胴を打つ・四枚目」「残心を取る・五枚目」

あのはらはらと散る花びらのように、ひとひら、ひとひらを連続させることで、技が止まる事なくつながっていく。潔く散る桜……。そうだわ、この「ひとひらの境地」で稽古してみよう)

そう思うと、玲子は竹刀を提げ刀たげとうに持ち、静かに遼太郎の正面に立った。

「先輩、もう一本お願いしたいのですが」

「エッ、無理するなよ。もう大分暗いぞ」

遼太郎は決意を確かめるかのように、玲子の顔をじっと観た。

玲子の瞳の奥は無言の自信で漲みなっている。さらに、体全体から燃え立つような気が溢れ出ている。

「よし、あそこの木の下が一番明るいようだ」

遼太郎はそう言つと、先程、玲子が見つめていた桜の木の下へ向かって歩き始めた。

この後の玲子はすごかった。

「攻めるー押すー打つー引くー構える」等の一連の動作が、まるで熟練者の踊りの如く、スムーズに行われていった。

(どうですか、先輩。さっきまでとは違うでしょ。私、何か、風の流れにでも乗って、自然に動いているみたい……)

玲子は技を繰り返し続けた。

玲子に一切を任せた遼太郎は、次々と打ち込んでくる玲子の太刀を、舞台役者を引き立たせる相方のように、的確に受け止めた。

時は、ゆづに三十分を越えた。

「ドオー！」

文句なしの見事な引き胴を決めたところで満足したのか、玲子は構えを解いた。連続して動いていた割には、呼吸が乱れていない。

「どうでしたか。先輩」

「すごい、実にすごかった。まるで何かを取り付いたようだったぞ。よく、ここまで腕を上げたな」

玲子は、にっこりと微笑んで遼太郎を見上げた。そして、さらに上方に眼を移すと、まるで懐かしいものを見るような瞳で桜の木を仰いだ。

「ありがとございました。これもみんな先輩と……桜のお陰です」

「桜？」

「はい」

玲子は、遼太郎に敢えて説明はしなかった。ただ、心の中でこう伝えた。

（先輩は、当然悟っている境地ですよ。そして、この境地に達した「ひとひらの心」は私の心。これからの私の行き方を観てみてください。特に、先輩に対して……）

遼太郎は「桜」について、何も聞かなかった。ただ、「桜」から大事なヒントを得たのだなと想像した。

「これだけやれば、満足したろう。では、引き上げることにしよう。いいね」

「はい」

二人は、木刀、竹刀を専用のケースにしまうと、それを肩に掛け、特訓の稽古場から脇の道に出た。そして、二人は同時に振り向くと、そろって、「道場」に「礼」をした。

玲子は導いてくれた桜の木を見た。花びらは依然として、連続して舞っている。ひとひら、また、ひとひら……。

二人は、両側が桜並木になっている道を、ゆっくりと並んで歩いた。所々にある照明にライトアップされて、うすピンクの花びらが白く浮き上がって見える。そして、そのバックには濃紺の空があり、たくさん星が瞬いている。まるで桜を愛でに来たかのように、視野いっぱい降りてきている。

「寒くなってきたけど、大丈夫かい？」

遼太郎は、玲子の方を振り向きながら、いたわるように聞いた。眼と眼が合った。

（ああ、この瞳だわ。私が求めていた男の人の目。誠意のこもった……何というか……慈愛、そう慈愛の眼。……うれしい……）

その時、偶然手と手が触れて重なった。

（はっ、「手」。——今がチャンスだわ。玲子「手の受け入れ」をするのよ。がんばれ！）

玲子は自分自身を励ますと、そっと遼太郎の手の先を握った。

遼太郎の手は温かった。

遼太郎は、冷たい玲子の手を被うように握り返した。

心地好かった。玲子は、その姿勢のまま、自分の頭を遼太郎の肩付近に預けた。スーッと全身の力が抜けていくようだった。

二人は、そのまま歩いた。

二人にとって、手をつなぐことは稽古の延長であつた。先程は剣を通じて、お互いの気を通させた。今度は、手を通じて体中の温もりを通わせている。

二人は、どちらからともなしに固く手を握り合った。二人の手のひらは、まるで離されていた割り符のようにピッタリと合わさつた。

（わたしは、やっと、「目と手」から開放されるのね。長かつた……。それに、大好きな桜が「ひとひらの境地」を授けてくれた。あの境地は忘れない。剣に対しても、先輩に対しても……）

突然、遼太郎は立ち止まった。

玲子もほとんど同時に足を止めた。

二人は向い合うと、満開の桜が見守る道の真ん中で、そつと唇を重ねた。

重ねた唇から、触れ合う胸から、背中に回した手から、二人の温もりはお互いの全身にゆっくりと滲み渡っていった。

（了）